

車が普及する以前の移動・輸送手段とは？

自動車が普及する以前、人々はどのように移動し、どのようにモノを運んでいたのでしょうか？

戦前期（1920年代以降）には、オートバイ・自動車が登場しますが、一般の家庭にまでは普及せず、自転車が増え、移動手段にとどまらず、後方に台車を付け、リアカーとして輸送用途にも使用されました。

自転車は、幕末開港以降、主にアメリカ・イギリスからの輸入に仰いでいましたが、1910年代には国産車が市場の半数を占め、さらに第1次世界大戦中（1914～19年）の輸入途絶を機に、国内需要のほとんどをカバーしました（自転車産業振興協会『自転車の一世紀—日本自転車産業史—』ラテイス、1973年）。

那珂郡（現在の常陸大宮市の大部分が含まれます）でも、自転車産業の発展と符節を合わせて、その数が増加しています。これは隣接する久慈郡でも同じです。

さらに、点線で示したのは「馬車（荷車）」の数です。こちらは、久慈郡で横ばいなのに対し、那珂郡では自転車と同様、1910～20年代に増加しています。

那珂郡では、自転車の普及と同時に、馬車もまた輸送手段として重要な位置を占めていたと考えられます。



近現代史部会協力員 棚井 仁
(東京大学大学院)

その背景に、農工業生産との関係、農業経営（畜力の利用）との関係、鉄道との関係（駅の有無）、山林面積の多寡や地形など、様々な要因が推測されますが、この統計資料からわかるのはここまでです。

近現代史部会では、編さんの指針として、「地域に生きた人々の経験にもとづく“顔の見える歴史”を」ということが、話題に上ります。しかし、地域の人々の日常を知ることができる史料は、決して多くありません。そのため、新しい史料を発掘したり、経験者・当事者の方に直接お話を伺う必要があります。この点で、市民の皆様のお力添えなくしては“顔の見える歴史”を書くことは不可能と言えます。史料の閲覧や体験談の聞き取りなど、ぜひご協力頂けますようお願い申し上げます。

